

2019年

1月1日
第322号

ゆうあい通信

発行所 石井記念友愛園
宮崎県児湯郡木城町椎木 644 番地 1
〒884-0102 TEL 0983-32-2025

天命を全うする

園長 児嶋 草次郎

心の欲する所に従って矩（のり）をこえず 論語

あけましておめでとうございます。昨年は1年間、職員たち、子供たちを守り支えていただきありがとうございました。子供たち、それぞれに成長することができました。

しかしまた、悲しいこともありました。開設時から園長をしてくださっていた石井記念神武の家の、若松健二先生を12月に病気で突然失ったのです。社会的養護・養育の未来を切り開いていく同志でした。同じ戦士でした。

くじけずひるむことなく、私たちは前進したいと思います。それぞれに与えられた天命を全うするまでです。今年も皆様の御支援をよろしくお願い致します。

以下、クリスマス会での園長としての話と、若松先生の葬儀での弔辞を掲載させていただきます。

クリスマスおめでとうございます。今年は随分あたたかいクリスマスを迎えています。庭のサルビアはまだ霜にやられず赤い花をつけています。こんなことは今までありませんでした。地球温暖化の影響だと思います。

地球温暖化と言えば、今年の台風24号はすごかったですね。園庭のコブシの木や桜の木が倒れました。この友愛園を改築した時に植えた記念樹です。山を見ると杉の木もかなり倒れていました。小学生のみんなは、学校に行く途中、その姿を何本も見えています。

被害はこの友愛社だけではありません。中学生が学校に通う時通る椎木坂も、木々が道路に覆いかぶさるように倒れて道路をふさぎ通れなくなって、高鍋の黒谷坂も崖の一部が崩れて通行禁止となって、新富の方から随分遠回りをしてしばらくの間通学をしています。おそらく木が倒れて送電線を切ったのだと思いますが、電

気も一晩付きませんでした。

冬あまり寒くないのは、年寄りにとっては助かることですが、地球温暖化にともなう一連の異常気象の一つだとするならば、ありがたいなどとは言っておれません。来年、今年以上に暑い夏になったら、また今年以上に強い台風が来たらどうしようなどと考えてしまいます。

さて、今年1年については、館長のれいなさんが振りかえてくれました。私は、せつかくですから、みんなの心が広く大きくなるような話をしたいと思います。

今年は、木城の「新しき村」開村100周年ということで、関係の行事が木城町内でも行われました。友愛園の子供たちは、皆、3年に一度は20Kハイキングで新しき村まで歩き、現在そこを守っている松田省吾さんの話を聞くようにしています。ここにいるみんなのほとんどは行ったことがあります。

武者小路実篤という小説家が、ここに農業を中心にした理想郷を作ろうとして50人前後の若者たちと一緒に一時期大地と格闘した所です。その思想は「人類愛」と呼ばれたりしているようですが、次の実篤の詩にその思いがこめられています。

山と山が讃嘆しあうように
星と星が讃嘆しあうように
人間と人間とが讃嘆しあいたいものだ

「新しき村の精神」の中では実篤は次のように述べています。

「全世界の人間が天命を全うし各個人の内にすむ自我を完全に生長させる事を理念とする。」

そのために、「他人の自我を害してはいけない」とも書いています。すべての人類兄弟姉妹が天命を全うできる世界を作るための拠点として、新しき村を作ったのです。

これらの言葉を、友愛園式に解釈するならば次のようになります。それぞれ一人ひとりが、天から与えられた使命をそれぞれの人格を、互いに害することなく、共鳴し合いながら完全に成長させることを理念とする社会を作ること。

もっと具体的に言うならば、次のように言えるでしょう。現在、友愛園と小規模児童養護施設じゅうじの家合わせて51名の子供が生活していますが、天心館のライキも三友館のエイジも、生命館のノアもじゅうじの家のミナミも、一人ひとりがこの集団生活の中で互いに害し合う(馬鹿にし合ったり、いじめ合ったり)のではなく、天(神様)から自分たちに与えられた使命をはたし、人格を成長させること。そのことを理想とする友愛園を作るということ。

天命というのは天から与えられた使命ということです。それではみんな一人ひとりに与えられた使命とは何ですか。それは一人ひとり違います。中3生が6名いますが、高校に進学すると言っても、将来の夢・志はそれぞれ全然違います。「与（とも）に共に学ぶべし、未だ与に道に適くべからず」（論語）の通りです。夢・志についてはそれぞれの生活手帳にしっかり書いています。タクマは高校卒業後おそらく大学まで行ってコンピュータ関係の仕事につくでしょうし、リンは野球をきわめてプロ野球の選手になるでしょう。

使命とは、その夢・志を実現することで、世のため人のためにプラスになる存在になるということです。そのためにみんなはここに集まって来ているのです。51名の子供たち、だれ一人ここで生まれた者はおらず、宮崎県の各地から集まって来ています。天（神）から選ばれてここに来たのです。

なぜなのか。天命をはたすためには、それまでの自分の運命を変え、また自分の人格をきたえ直す必要があるからです。それぞれに弱い部分を持っています。未熟な生活習慣からきたえ直さねばならない者もいますし、自己コントロール力や規範力からきたえ直さねばならない者もいます。その課題もそれぞれ違います。人格をきたえることで運命も変わります。

今年は、中学生になってここに来た者が何人もいます。与えられた時間が短い。短い者は、あと3か月ほどしかない。自分の人格を変えるということは簡単ではない。自分の運命を変えることは簡単なことではない。日々自分に与えられている天命とは何かを常に考え自覚しながら、その人格を変えるために努力をしてほしい。と思います。運命を変える努力をほしいと思います。

武者小路実篤の話から話が発展しましたが、石井十次先生もここに理想郷を作るために奮闘努力しました。それから100年以上の歴史が流れて今の友愛園がここにあります。石井十次先生の考えた理想郷は、実篤よりもっと現実的で具体的でした。今、みんなは、その精神と福祉文化の中で生活しています。これは幸福なことです。

私は、この木城、高鍋を含む児湯・西都地域を宇宙に開かれた場所だと、訪れる人たちには説明しています。1000年2000年という単位で理想郷作りが行われ来た。この地域は天才のインスピレーションをかき立てる不思議な力が働く場所である。ここから10K南の方に西都原古墳群があります。やはり20Kハイキングで3年に一度はみんな歩いていく。ここには約300の古墳があります。おそらく卑弥呼みたいな人が天をあおいで、ここに理想郷を作ろうと決断した。300個も古墳があるということは、何百年かあそこに国があったということになります。

高鍋町にも一つの理想国が存在しました。福岡の方から国替えで来た秋月家が秋月種茂の時代に一つの理想国を作りました。種茂の作った藩校明倫堂で石井十次も

学びました。

このように理想郷作りの場所に囲まれた中でみんなは現在生活しています。そのことを自覚しなければなりません。このことはみんなにとってはチャンスです。

先ほどの話にもどりますが、自分の使命をはたすために選ばれてここに来たのです。そんな使命を実現するためには、強い人格が必要です。自分の弱さを自覚し克服しそして運命を変えるために、来年も時間を大切にし、日々の修行に取り組んでほしいと思います。

特に中学生以上の子供たちは与えられている時間が限られています。石井十次先生の精神と文化の中で生活できることに誇りとプライドを持って、自分の夢と志を実現するために、日々努力してください。来年がここにいる一人ひとりにとって、今年以上に良い年になるように祈ります。

弔辞

故若松健二先生の御仏前に、謹んでお別れの言葉を申し上げます。

若松先生の突然の御逝去を、12月12日に児童養護施設神武の家の丸目主任より電話で聞いてびっくり致しました。仮通夜で先生の御遺体を目の前にし、現実であることを確認し、深い悲しみに突き落とされました。

10月の北海道札幌で開催された全国児童養護施設長研究協議会には、一緒に参加し、お酒も酌み交わしました。

その後、少し体調を崩されたということで、11月7日に入院されました。ガンとは言われましたが「1か月くらい入院して来ます」ともおっしゃっていましたので、まだ初期の段階なのだろうと想像しました。現代医療は進化していますので、ガンは克服できる病気です。それから1か月も過ぎましたので、ぼちぼち御見舞にいかねばと考えていたところでした。

こんなに早くにあっけなく逝ってしまわれるとは、全く予想もしませんでした。残念でなりません。身近な人の死にはもう何回か遭遇して来ておりますが、若松先生の死も、私にとっては納得のいかないものであります。なぜ天はこんなに早く彼を引きあげてしまわれたのか。

若松先生は、私たち石井記念友愛社の児童養護施設の職員たちにとっては、同じ理想をかかげ開拓していく戦士でありました。石井記念神武の家は、宮崎県では10個目の児童養護施設として、平成28年4月に県や高原町等の御支援・御協力により新設されました。

児童養護施設は県央・県北地域に偏在化しており、それを是正するためでもありました。県西地域の社会的養護を必要とする子供たちの命を守り、一日24時間365

日、安心安全を保障する子供の家として設立しました。通いの施設ではなく、一般家庭と同じように生活の場ですので、職員たちの責任は非常に重く、それを統括する園長の責任はさらに重いものです。

先生は、県の職員としてずっと働いて来られましたが、児童相談所のケースワーカーをされていた頃、私たちは大変お世話になりました。実直で誠実で責任感の重い先生のお姿には、常に尊敬の念を抱いておりました。児童施設宮崎学園の園長も経験され、ご縁があって、石井記念神武の家の初代園長をお引き受け下さいました。天のお導きを私は感謝しておりました。

先生は、常に子供中心の施設運営をしてくださいました。職員たちにも誠意をもって一人ひとりに接してくださいました。ゼロからスタートした施設ですので、一つ一つ作りあげていく過程において、御心労もあったと思います。私たちのフォローが充分でなかったと申し訳なく思っています。

しかし、先生、御安心ください。職員たちもそれぞれ育って来ております。先生の志をしっかり引き継いで、今後さらに結束して仕事をくれるものと確信しています。14人の園の子供たちもこの現実をしっかり受け止め、未来を切り開き自分の運命を変えるために、これから自分の生活に誠実に向き合ってくれるものと思います。

天は志が高く大任（おおきな役割）をまかせようとする人間には、様々な試練や災難を与えます。それにひるむことなく負けることなく、私たちは前進して行きます。

天国から私たちを、子供たちを見守って下さい。そして、子供たちの未来を開くこの仕事を貫徹するために、勇気と力を与えてください。

若松健二先生、ありがとうございました。さようなら。